

アンナプルナから始めよう！ トレッキングに行ってきたぞ♥

先月号のサンチャイ通信で紹介した通り、私達は事務所の門脇さんと一緒にゴレパニ周遊トレッキング7泊8日の旅に行ってきた。1日平均8時間、地図上では1日10km程度だが坂道が多く、実質20kmは歩いているような気がする。標高は1000m程度の所から登り始めて、最高3262mまで到達した。途中で1日1700mの登りや下りも経験し、美澄は膝を痛め、マラソンで鍛えた私も、この登りでしまいガス欠を起こしかけた。そんなきついトレッキングだったけれど、アンナプルナ南峰やダウラギリ峰が晴れた空にくっきり間近に見えて感激した。また、カリガンダキ川を上流に遡る道中見えたニルギリ峰も印象的だった。ヒウンチュリ峰やマチャブチャレ峰の麓にあたるタラパニやガンドルンを歩く頃から曇り始め、ダンプスまでは雨となった。日程後半の悪天候は少し残念だった。日程は以下の通りだ。

- 10月19日 カトマンズ→(飛行機)→ポカラ→(タクシー)→ナヤプール→ビレタンティ(1037m)
→ティルケドゥンガ(1577m) ※ヒマラヤは未だ見えない。我慢我慢。先は長いぞ。
- 10月20日 ティルケドゥンガ→ウレリ→バヤタンティ(昼食)→ゴレパニ(2853m) ※これが寒い！！
- 10月21日 ゴレパニ→チトレ→シーカ(昼食、1920m)→ガーラ(1768m)→タトパニ(1189m)
※タトパニには温泉あり。あったかいぞ！
- 10月22日 タトパニ→ガーラ→シーカ(昼食)→チトレ→ゴレパニ ※またまたこれが寒い！！
- 10月23日 ゴレパニ→プーンヒル(3198m)→ゴレパニ(朝食)→デウラリ(3262m)→バンタンティ(昼食)
→タラパニ ※マチャブチャレが雲で見えない！
- 10月24日 タラパニ→ガンドルン(昼食、1951m)→ランドルン(1646m) ※V字峡谷川渡り。きついぞ！！
- 10月25日 ランドルン→トルカ(1859m)→ペリカルカ(昼食)→ポタナ(2200m)→ダンプス(1799m)
- 10月26日 ダンプス→フェディ→(タクシー)→ポカラ(900m)→(飛行機)→カトマンズ

道中はロッジやバッチィ(茶屋)もあり、くたびれたら休憩もできる。ジョムソムとポカラの間をロバの背中に乗って物資が移動する。ドッコ(逆円錐形の籠)に物資を乗せたクーリーも歩く。それに混じってトレッカーも歩く。ゴレパニ峠からタトパニに至る街道はまさに農家の軒先を歩く感じで、ここが「ヒマラヤ保全協会」という日本のNGOが支援をしているシーカ谷である。地盤が非常に脆く、ちょっとした雨でも土砂崩れが起きそうな地質だった。農家は、ヒエや稲の他に、ソバも栽培していた。「ナマステ！」と挨拶しては、二言目には「ミタイ(甘い菓子)！」や「スクールペン！」とせがむずれたガキにはうんざりしたが、「チャイナ(ないよ)！」といなして歩いた。ガンドルンやランドルン、ダンプス辺りはACAP(アンナプルナ保全地域プロジェクト)の活動エリアで、薪の代わりに灯油を燃料に使うよう奨励していた。ランドルンから川を挟んだ対岸のガンドルンの尾根を夜見ると、まるで京都の大文字焼きのように、真っ暗闇に電灯が灯っているのがわかる。真っ暗闇で星を見上げるのも楽しい。でも、やはり間近にヒマラヤの峰を望めたのが良かった。アンナプルナ地域は標高も低く、初心者入門トレッキングに丁度良い。ポカラからのアクセスも良く、短期の滞在のお客様には是非奨めたい。私達も、機会があればガンドルン辺りまで行って、今回見れなかったマチャブチャレを見たいと思っている。

今回は、ロータストラベルという旅行代理店に依頼して、テント泊で朝昼晩3食付き、荷物も運んでもらう、文字どおりの大名トレッキングにした。1人300ドル(ポカラまでの航空賃は別)は、なかなか良心的だと思う。チリン君というシェルパをサーダーに、ガイド2名、コック3名、ポーター4名の編成だ。因みに彼等の日当であるが、サーダーとガイドは1日150ルピー、ポーター150ルピー(通常は120ルピーだそうだが、ダサインの時期は高いそうだ)、コックは朝晩80ルピーで昼30ルピーだそう(これはエベレスト方面に行った他の人のケースと比べたら相当安いらしい)。サーダーは代理店から11000ルピーを前渡されて、その予算の中でポーター達をリクルートし、テント設置場所の所場代を払う。コックは昼食や宿泊場所へ先回りして食事の支度をする。ポーターはテントや食糧、我々の荷物を宿泊地に先に運ぶ。我々とともに歩くのはサーダーとガイドだ。サーダーは外国語が話せないと成れない。ガイドのカンチャ君はチリン君の弟だが、英語ができない。言葉ができなくても道を間違えなければガイドはできるが、美澄も私もネパール語が多少わかるため、道中結構盛り上がり、楽しいトレッキングになった。(浩司)

《お断り》

トレッキング出発1週間前に私が3mmの丸坊主になった件で、仏門に入ったとか浮気の懺悔だとかハゲの諦めだとか様々な憶測が飛び交っておりますが、真相はトレッキングに備えて単に頭が洗いやすいようにしていただけです。どうせなら眉毛も剃ったらとも言われましたが、そこまでやったら協力隊員です。それにしても、丸坊主で迎えたゴレパニの朝は首周りが寒かった。皆さん、髪は大切にしましょう。(頭部森林保全協会会長より)

「地球の歩き方」より詳しい？ ヌワコット郡観光案内

後述の障害者調査団を見送った後、私はティハール休暇を利用し、小学校建設計画（無償資金協力）でお世話になっている建築コンサルタントの福渡さんを誘って、11月8日、9日の2日間、ヌワコット郡の小学校視察に出かけた。7月にも訪問したトゥブチェ村の2校に加え、今回はタディ川を車で渡って悪路を行くカラニタル村の5校を訪問した。サンチャイ通信8月号で紹介したヌワコット郡の小学校のイメージは今回の訪問でも変わるものではなかったが、今回は建築の専門家が一緒だったので、建物のどこがどう問題か、より深く理解することができた。

ヌワコット郡訪問はこの1年で既に3回、これは事務所では最も頻度が高い。当然どこに何があるかだいたい把握できており、ちょっとしたおたくである。ヌワコット郡トリスリバザールへの道は断崖絶壁を3時間半も走るもので、車に酔う人には決してお薦めしない。でも、カトマンズとちょっと違った風情を味わうことができる。

1日目。カトマンズを早朝出発。カカニの丘との分岐点を少し先に進み、ラニポワ村で一休み。ここのチャ（ミルクティー）はうまいぞ（1杯2ルピー）。また、朝の澄んだ山々の向こうに、ランタンリルンやガネッシュヒマール、マナスル等の山々を見ることができる。ラニポワからは一挙に下る。ヌワコット郡の中心地ビドゥル村やトリスリ村は、赤茶けた台地の上にある。トウモロコシや、ネパール国産米で最もおいしいと言われているポカレリ米の産地である。ビドゥルから先に進み、トリスリ川を渡ったところがトリスリバザールだ。右手にある「ジョシゲストハウス」で1泊しよう（100ルピー）。トイレもきれいだ。また、トリスリにはインドの援助で建設された水力発電所があり、電気も使える。「ジョシゲストハウス」でダルバート（豆スープと白い御飯。ネパール料理の定番！）。ニンニクが効いていてうまいぞ。店のカンチャ（使用人）であるビシュヌ君は働き者だ。食べ切れなければ食堂をうろちょろしている短足のボテ犬に肉をお裾分けしてあげよう。

バザールの上流にあるトリスリ水産研究センターに行ってニジマスを買おう。ここは青年海外協力隊の山田朋秀隊員の任地で、彼がいなくても日本人には優しく接してくれる。ここのニジマスは有名だ。内蔵処理も済ませてゲストハウスに戻り、サウジ（店主）に頼んでニジマスを唐揚げにしてもらおう。酒の肴にもってこいだ。

翌日はビドゥルからヌワコット村に登ろう。ここは西のゴルカ地方から興った現在の国王にも繋がる王朝が18世紀にカトマンズ盆地を制服した際、拠点とした王宮が残っている。山の尾根に位置し、ヌワコットの盆地が一望できる。王宮前広場までは車で行くことができる。

帰路は、再びラニポワに立ち寄り、大根を買って帰ろう。大きい大根は一束10ルピーだ。昔の協力隊員がこの地方に普及したラニポワ大根は、我が家の使用人にも大人気で、お土産に最適だ。ラニポワ周辺の農家は皆大根を栽培している。そして、帰りが夕暮れ時に近ければ、カカニの丘に行って夕日に染まるヒマラヤを見よう。なかなかロマンチックだ。（浩司）

エベレストが凄いよ！ 40分のヒマラヤ観光

後で紹介する障害者の調査団のアテンドで浩司さんがマウンテンフライトに行くことになり、良い機会なので私も一緒に行きました。朝7時5分発のフライトで、カトマンズの北西のガネッシュヒマールからランタン山系を経て、東のエベレスト山系を見て引き返す、約40分のフライトでした。料金は1人99ドルです。

カトマンズを飛び立つと、ランタンからエベレストにかけては途切れることなく雪をかぶったヒマラヤの山々が連なっていることがわかります。ガウリシャンカール（7145m）やメルンツェ（7181m）は形に特徴がありすぐ判りますが、先日田部井淳子さんが登頂に成功したチョオユー（8153m）等はよく判りませんでした。さて、肝心のエベレスト（8848m）は、ヌプツェ、ローツェという8000m前後の峰に遮られ、山頂部分がわずかにそびえているのが見えただけでした。しかし、やはりその姿は他を圧倒するものがあり、遠くからでもすぐに判りました。旋回する飛行機のコックピットからエベレストを見せてくれるサービスもあり、ヒマラヤ観光を十分満喫することができました。

帰路は向かい風で、プロペラ機体が大きく揺れて私はすぐに酔ってしまいました。マウンテンフライトは1回乗れば十分です。次にエベレストを見る時は、トレッキングで出かけて行ってゆっくり拝みたいものです。（美澄）



私の仕事紹介 (その8) 外務省有識者の「非常識」を笑う

9月末から10月8日にかけて、有識者によるJICAプロジェクトの評価ということで外務省が調査団を送ってきた。選ばれた有識者は検察庁検事で、大学で国際関係について教鞭もとり、政府開発援助(ODA)に関して著作もある。今回の評価対象に林業普及計画プロジェクト(終了案件)があり、私はその後継プロジェクトである村落振興・森林保全計画の担当である関係で、ポカラでの日程に同行することになった。ポカラに行く前から、同検事は訪問した先々で検事口調に厳しい詰問をし、相手の話を聞く時の態度が非常に悪くて鬱鬱をかいまくった。検事のお考えにももっともな部分もあったが、折角の指摘がその仕方によってはまともに受け取られず、悪感情だけを後に残してしまった。まるでこちらが被告扱いだったから。

さらに、ネパールの文化・風俗・習慣に対する不寛容ととれる発言が目立ったのは残念だった。ポカラのホテルで昼食していた時、検事は窓の外を眺め、その庭にあったラマ教のマニ塔にかかる白旗を見て、「何あのしみったれた旗は。見苦しいっらないわ。」と言った。これを聞いた時、この人の国際経験とやらの底の浅さが見えてしまった。こうした仏塔とそれにかかる万国旗のような白旗にはラマ教の経文が記されており、山にトレッキングに出かければ必ず見かけるチベット系住民の由緒正しい旗である。世界のどんな国に行っても、そこに建造物があれば、それらはそこに存在する理由が必ずある筈である。それを、自分の美的価値基準に合わないからというだけで「非」とみなす発言は、卑しくも日本のODAについて著作もある「有識者」たる者がやってはいけないことだと思う。「あれは何なの?」とひとこと聞いてほしかった。

これなどほんの一例に過ぎないが、サンチャイ通信の読者にもODA関係者が少なくないので、派手に内部告発して後で自分の首を絞めることはしたくない。ただ、仮にも外務省が有識者と選定した人物である。言動にはもう少し慎重を期してもよかったのでは?日本のODA指針の一つに「途上国の自助努力の支援」という柱があるが、これは途上国側の努力を先ず尊重することから始まると思う。端から途上国の事や習慣を馬鹿にしていて、まともにODAに携われる訳がない。(浩司)

私の仕事紹介 (その9) JICA史上初、障害者ミッション来る

乾季に入ったとたん日本からの来訪者の数が急激に増えた。

11月初旬にやって来た調査団に「障害者の国際協力事業への参加」現地調査というのがあった。JICAが初めて障害者を派遣するというある意味では歴史的な調査団である。また、肢体障害者や聴覚障害者の他に、国際協力総合研修所(JICAの1機関)の所長が含まれており、非常に気を使う調査団でもあった。この調査団の目的は、国際協力に参加の意志を持つ日本の障害者が、途上国で生活するにあたって遭遇するであろう途上国の受入環境の調査と、途上国側に日本の障害者でも参加できるような障害者福祉分野での援助ニーズがあるかどうかの確認だった。

車椅子の幅で入れるバスルームと客室を備えたホテルの確保から始まり、全訪問先の位置と立地の確認、分刻みのスケジュール作成等、準備をしっかりと行った上で、調査団を迎えた。空港に到着したタラップから車椅子団員を下に降ろすところから6日間完全フルアテンド、毎晩ホテルまで送り届けた後でオフィスに戻って書類を整理し、帰宅が10時や11時の日が続いて相当に疲れた。かなり余裕をもったスケジュールを組んだつもりだったが、車椅子団員の移動は想像以上に時間がかかった上に、聴覚障害者への通訳は、「英語～日本語」と「日本語～手話」という2段階を踏んだので、かなりタイトなスケジュールだった。

残念ながら、この国はまだ障害者のアクセスの良い国とはなっていない。また、各障害者団体がバラバラでお互いを批判することまであり、完全にまとまりを欠いているし、政府自体が障害者福祉について確固たる政策を立案実施しているとは言いがたいことがわかった。今最も現実的なのは、日本に障害者の研修員を受け入れ、途上国の障害者のリーダーを積極的に育成してゆくことだろう。障害者が自ら社会の一員としての権利と責任をもっと認識して、社会活動に参加してゆかねばならない。

わが国がネパールの社会福祉分野で今後支援を考えてゆくならば、1つの可能性は村落振興を通じた障害者リハビリテーションだろう。村落開発の小規模プロジェクトの立案実施に、女性や老人、子供、低カースト等とともに障害者の視点を取り入れ、社会的弱者の参加を通じて彼等の自信と社会の構成員としての自覚を植え付けるもので、施設型リハビリを通じて障害者と健常者の差別意識を育ててしまった日本の失敗を材料に、在宅リハビリに主眼を置くものである。

疲れる調査団だったが、なんとか無事に帰途についてくれて一安心だ。私自身これまで福祉分野については詳しくなかったが、今回のフルアテンドを通じて学ぶところも多かったし、楽しいスケジュールだった。(浩司)

シータの流産...神はなぜこれほどまでに不公平なのか!!!

10月30日(水)、シータが再入院しました。翌日、緊急手術の末、シータは流産しました。予定日が12月でもう少しのところだったので残念です。KCの悲しそうな顔を見るにつけ、そして病室で人知れず涙にくれるシータの話を聞くにつけ、私達も悔しくて仕方ありません。KC夫妻は、既に2人の子供を幼少で亡くし、今度の子供に大きな期待をかけていたのです。人口増加率が2.1%もある超多産国家で、何故この夫婦には元気な子供に恵まれないのでしょうか。流産の直接的な原因は子宮筋腫だといえます。シータがショックから立ち直った時、私達は総費用を負担してでも筋腫除去手術を受けてもらいたいと思っています。シータも私達の家族の一員です。KC夫妻の子供は、私達にとっても大切な子供なのです。(美澄)

サーブ(ご主人様)が頭を丸めた!!

10月12日(土)、浩司さんの頭に、日本から持って来た電気バリカンをあてました。どうせ短くするのなら一番短いのが良いだろうと思い、長さ調節のきくバリカンで最短の3mmを選び、途中テクノカット、モヒカン、林家三平師匠頭、にして写真を撮り、徐々に丸坊主にしていきました。元々、浩司さんはトレッキングに行ったら洗髪する機会がないだろうから坊主頭の方が便利だと言っていました。ただ、その後1週間の反響を聞いていて、こんなに簡単に坊主頭になれるならトレッキング前日に刈れば良かったと後悔していました。ネパール人からは「トピー(ネパール帽子)かぶったら似合う。」と言われるし、合掌姿が妙に似合ってしまうし、なかなか楽しいエピソードでした。丸坊主は高校1年の時以来だそうですが、味をしめた浩司さんは、次のトレッキングの時にも頭を丸めると宣言しています。(美澄)

あちらでプジャ！こちらでプジャ！ ダサインはプジャで明ける

<JICA事務所編>-----

10月18日（金）JICA事務所ですらに対するダサインプジャが行われました。ダサインはヒンドゥー教のお祭りで、戦いの女神ドゥルガを祭るものです。ドゥルガは生け贄を好む神で、ダサインの時は各家でドゥルガに、収入に応じて山羊、鶏、アヒルなどの生け贄を捧げます。また車、自転車、機械など力を生み出す物はドゥルガが宿るとみなされ、やはり生け贄を捧げます。ネパール人曰く「機械にも食べさせなければならない。」と言うことでした。

事務所ではこの生け贄を捧げるプジャを、事務所の車、所員、希望する専門家の車に対して行うので、私達の車もプジャをしてもらうために事務所に運びました。

朝事務所に行くと、事務所の庭に車を並べて運転手達が嬉々と車を飾り付けており、その横で生け贄用の山羊（去勢されていないオス）が8頭、のんびりと草を食べていました。車の飾り付けは、ボンネットを開け、エンジンにアヒルの卵、ロティ（薄焼きパン）、25パイサコイン、お菓子を置き、バンパーにきらきら光るモール、マリーゴールドのレイを飾り、赤い紐を結びます。

10時半頃準備が整い、いよいよプジャが始まりました。まず、山羊の額に赤い色を付け、水をかけます。そして山羊がプルプルと身を震わせて水をはじいたら、首を切って良いという合図です。このプルプルと身を震わせるまで、切ってはいけませんので、やるまで何度も何度も水をかけ、身を震わせたら、いよいよ山羊の首を下から切ります。首を切る役は事務所の守衛の1人がやったのですが、山羊を2人がかりで抱え血を車の前後にかけていきます。かけ終わると首を切り落とし、頭の上にドゥーブという紙をねじったようなお線香をとめます。そして車に切った山羊の皮を張り付けます。これは食べ物あげる意味があります。1頭で6台の車にプジャをしました。

我が家の運転手のクリシュナはすっかりこの皮を多めにもらい、ニコニコしながらバンパーのみではなくタイヤホイール4つ全部に付けたのでした（この皮は後でコテツがはがして遊んでました）。私は、こういう光景を見るのはわりと平気ですが、さすがに山羊が切られる瞬間に「メェ〜」と言った時はかわいそうになりました。それに対しネパール人は皆嬉々として見ているのは文化の違いでしょうか。

全部のプジャが終わり、お昼は、私達も額に赤い色をつけてもらい事務所の庭で朝から準備していたご馳走を食べ、朝の凄惨な光景も忘れ楽しい一時を過ごしました。プジャに使われた山羊はどうするかというと、運転手達が解体し肉を自分の家に持ち帰り食べるのです。クリシュナもこの肉をもらい喜んでいました。こんなに楽しそうなネパール人を見ることはなかなかありません。

<我が家編>-----

我が家でも、家にプジャをしてもらうために、山羊を買いました。はじめプジャ用去勢されていない山羊（ボカ）を使うとのことだったので、ボカを買う予定だったのですが、KCが嫌な顔をしたので聞いてみると「ボカは肉が臭いから」と言うので去勢された山羊（カシ）を買うことになりました。山羊は結構高く、使用人の給料1カ月3000~5000ルピーに対して1頭2500ルピー~3000ルピーと言われ、市場を探し回ってようやく2000ルピーのカシを買ってきました。

しかしカシを家に連れて帰ると、コテツが自分の獲物と勘違いしたのかカシの首に噛みつき傷を負わせてしまいました。その後もすきあらばカシに近づき襲おうとするため、カシは裏の家に預かってもらいました。以前にも子犬を襲った前科者のコテツは、ここでもその凶暴性をみんなに知らしめました。

結局、私達はダサイン中トレッキングに出かけたため、カシを切ったプジャは見れませんでした。帰ってくるとカシは跡形もなく、冷蔵庫の中に私達用に肉が残されていただけでした。この肉はKCにカレーにしてもらいました。（美澄）

私、できちゃったみたい。 美澄の懐妊

ゴレパニ周遊トレッキング終盤から、「（生理が）来ない、来ない。」と騒いでいた美澄であったが、さすがに予定日を1週間以上も過ぎて心配になり、11月5日にCIWECクリニックという外国人がよく行く診療所に診察に出かけた。美澄は妊娠していた。出産予定日は来年の7月5日、私の一時帰国スケジュールに合わせた計画的犯行だった。美澄は来年5月には出産のために早期帰国する。半年くらいはネパールを離れることになるだろう。

シータの流産の直後だけに、未だKC夫妻には話していない。異国での妊娠は出産準備も大変だから、美澄を大事にいたわってゆかねばならない。後は、さすがに障害者の調査団のアテンドと重なって、その大変さを痛感させられた直後だけに、無事に元気な赤ちゃんが生まれることをただひたすらに祈るのみだ。因みに、我が家の近所で美澄と普段仲の良い、大町泰子さんも第2子ご懐妊だそうで、2人で助け合ってゆけることも心強い。（浩司）

編集後記

★私の赴任から丁度1年が経過し、先日大家のラジバンダリ医師と賃貸契約の更改をしました。2年目も1カ月27000ルピー（約54000円）で据え置き、但し1年分一括前払いという内容でした。今カトマンズの家賃はむしろ下落しており、大家が私達が1年前に口頭で合意した2年目は30000ルピーというのに固執するかどうかで少し不安でしたが、ものわがりの良い大家で助かりました。お陰で気持ちよく2年目のスタートを切ることができました。美澄の妊娠という事態もあり、暫くはカトマンズを夫婦で離れることはできませんが、いずれ大家の住んでいるダランの町にも行ってみたいと思っています。（浩司）

★今月はいろいろなことがありました。ダサイントレッキングでは初めてのテントキャンプを経験し苦しいながらも山登りの楽しさを知り、「次は何処に行こうかな。」と考えていたら妊娠していることが判り長期トレッキングはこれが最初で最後となってしまいました。当分は安静に過ごさねばなりません。一方でシータが流産してしまい、彼等の気持ちを考えるとこの事実をいつ伝えて良いものかと悩んでいます。（美澄）